

論 壇

きゅうまたたのしみつうまたたのしみ

窮亦楽通亦楽を生きた人—遠藤隆次

矢島道子

東京医科歯科大学教養部

Learning from the life of Endo Riuji

Michiko Yajima

Tokyo Medical and Dental University (pxi02070@nifty.com)

はじめに

長く古生物学会の活動に関わってこられた方々にとって、現在の古生物学会には言いたいこと、伝えたいことがたくさんあるに違いない。それで『化石』誌をリニューアルする際に「論壇」という企画を設けた。ところが、どうも表題が硬すぎたようで、原稿依頼を申し上げると、なぜか苦渋に満ちた表情をされることが多い。もちろん、「論壇」は、立派な充実した文章がずっと並んできている。しかし、もっと気楽に、もっと多くの方の自由な発言が展開されるように「論壇」を変化させていかなければならないと思うようになった。それで、非力を顧みず、あえて、こんなことが「論壇」に書かれていたら嬉しいと思うことを書いてみることにする。

最近、科学史学界では、「戦争と科学」を中心課題として研究に励んでいるグループがある。このグループから、地質学は戦争中に何をしていたのか、そして、戦後になつてどのように継承されたのか、プラスに働いたのか、マイナスに働いたのか調べてほしいと依頼された。戦争中に地質学者や古生物学者が何をしていたかを調べているうちに、私は遠藤隆次（1892～1969）というユニークな古生物学者に出会い、たくさんのことを学び、大変な感動を覚えた。この感動を私よりも若い人たちにも伝えたいと思い、ここに書き記す。

博物館エキシテンション

遠藤隆次の名前を最初に知ったのは、現在、北京大学に留学中の科学史研究者、山口直樹の研究発表（2002）である。彼は植民地科学のケーススタディとして満州国国立中央博物館について発表した。満州国国立中央博物館は、1935年に奉天に設立された満州国国立博物館（人文科学部）と同年に創設された満鉄教育研究所附属教育参考館（自然科学部）とが1938年に統合されることによって誕生し、その自然科学部長が遠藤隆次であった。それは、彼の46歳から53歳の頃で、力にみちていた時期である。遠藤は中国東北部での新しい試みとして、自ら留学

した米国のスミソニアン自然史博物館のような博物館を作ろうとした。その構想は以下のものであった（山口、2002）。

この満州国国立中央博物館は当初、諸事情により博物館に展示品を展示するというスペースを博物館内にもつことができなかった。そのために展開されたのが博物館エキシテンションという活動であった。従来の博物館が展示を中心とし、来館者を待つ受動的な博物館であったのに対して、この博物館エキシテンションというのは積極的に民衆を啓蒙するために教育の機能を充実させようとするものであった。これには東北帝国大学理学部地質学古生物学教室出身の遠藤隆次氏や野田光雄氏などが大きな関わりをもっていた。その博物館エキシテンションの内容は次のようなものであった。

1) 移動講演会

学芸官と学芸官佐が標本・機器、16ミリ映写機、フィルムをたずさえて学校を巡回し、講演・映画・実演を行った活動で、1939年に新京市内の日本人小学校で実施された。これは藤山一雄（人文科学部長）がデンマークでみたYMCAの旅行講演をモデルにしていたと思われる。

2) 現地入所科学研究生

机上の理科、算数の弊害をなくすことを目的に実施された職員を対象とする事業だった。1940年1月15日から29日までの15日間、日本人教員5人が参加して資料整理、荷物の運搬・掃除など展示場の開設準備と、自然科学に関する講義・実験・指導が行われた。この事業は、国立中央博物館の前身である満鉄教育研究所の講習科が行っていたリカレント教育を縮小し、博物館に適用したものと思われる。

3) 博物館の夕べ

講演と映画からなる事業で、定期開催が希望されていたが実現されなかった。1939年に5回、1940年に4回、1941年に3回、1942年に2回、1943年と1944年に1回の計17回の開催が確認された。会場としては新京市内の施設を利用した他、奉天でも開催された。1942年の満州帝国協和会・科学技術連合部会との共催になる第14回博物

館の夕べは、新京、奉天、ハルビンほか、様々な場所で開催された。参加者は少ないときで約800人、多いときで約1500人以上を数えた。なお「博物館の夕べ」の幾つかは「通俗学術講演会」という別称をもつが、同じような名称は、1933年に仙台の斎藤報恩会博物館が開館した時、1936年の第11回日本動物学会大会が同館で開催された時の講演会にも使われている。

4) 科学ハイキング

「市民の科学的興味を刺激し、体育および自然に親しませるため機会をとらえては都心より約半径50キロ半径の地圏に愉快にして効果おおき科学遠足」と紹介されている活動である。レクレーションを兼ねた、野外での自然観察・採集会で1939年3回1940年に1回行われている。科学ハイキングの参加者募集は新聞広告によっていた

(以上 山口, 2002より)

その他に、一般向け科学に関する読み物と国立中央博物館の活動を記録した『国立中央博物館時報』20数巻、学芸官の調査・研究成果を発表した専門家むけ欧文学術雑誌『満州帝国国立中央博物館論叢』全7巻の刊行、民俗博物館建設に先立つ『満州民俗図録』の刊行もある。

上記のように工夫された社会教育制度は、現在、盛んに議論されている博物館のアウトリーチのはしりといえよう。

チャールズ・D・ウォルコット

バージェス頁岩動物群に関係するドラマはすべて海のあちら側で行われていると思っていた。それが、遠藤隆次の主著『満州の地質及鉱産』(1935)を読んでいるうちに、急に海のこちら側までドラマが広がってきた。チャールズ・D・ウォルコットは、1913年に渤海湾内長興島より産するカンブリア紀化石を大量に記載していた。当時は日本の化石研究者も多く中国に渡っており、ウォルコットとの結びつきの糸が見えてきた。

中国東北部の地質調査は1860～72年のリヒトホーフェンに始まり、1895年の大本営の調査、1896年のクロボトキンの調査と進み、カンブリア紀の化石が産出することがわかってきた。精力的なウォルコットは、自ら中国にやってくることはなかったが、大量の資金と研究者をつぎこんだ。1903～04年には米国カーネギー学会よりB.Wills, E. Blackwelderが調査にやっけてきて、1907年にその成果をカーネギー報告書に発表し、1909年にはシカゴ大学教授J. P. Iddingsが日本および中国を訪問し、長興島でカンブリア紀化石を大量に採集した。1913年のウォルコットの論文は、この時の試料に基づいている。

中国東北部で化石を研究した日本人研究者は、どうしてもアメリカ・スミソニアン自然史博物館の標本と比較研究したいと思った。遠藤隆次は1929年(37歳)に渡米して、ウォルコットのいたスミソニアン自然史博物館で

初期古生代化石の研究に励んだ。遠藤はウォルコットに連絡を取っていたが、ウォルコットは遠藤の渡米直前に亡くなってしまった。それでもウォルコットの遺志は通じて、遠藤は十分な研究ができた。

コレニア

現在の日本列島ではコレニア化石は産しないが、戦前は中国の地で、コレニアを研究することができた。遠藤は1922(大正11)年、東北帝国大学2年生(30歳)の時に早坂一郎助教授に率いられて、中国・朝鮮半島に地質見学旅行に出かけた。遠藤(1970)はその時の様子を

「北京滞在中に北京大学地質学系学生と共に、万里の長城を望む八達嶺に地質親善旅行をやった。その頃グレーボー博士の提唱した震旦系の模式地を見学し、石灰藻の一種と思われていたコレニア属の各種を採集するという壮挙を敢行した。」

と書いている。

コレニアは1922年には珍しかったようである。遠藤は大学を出て満州に赴任するにあたって、「クリプトゾーンの正体をつきつめる」ことが研究題目として師である矢部長克から与えられていた。遠藤は

「この種のものが一般に信ぜられるように、ほんとうに藻類の作用によって作りあげられたものならば、その藻類こそは世界最初の生物に近いものと思われるので、生命の起源を明らかにするうえに、なんらかの貢献ができるかもしれない。・・・現在の私に関する限りにおいては、・・・この種の岩礁は無機源によってできたもので、生物とはなんら関係ないと信じている」

と回想している(遠藤, 1965より)。遠藤はコレニアを偽化石と考えていたのだ。私は遠藤をそしるつもりは毛頭ない。そうではなくて、コレニアの研究が大変難しかったことを伝えたいと思うだけである。

窮亦楽通亦楽(きゅうまたたのしみつうまたたのしむ)

遠藤の『原人発掘』(1965)の巻末に遠藤の略歴が書かれている。1892年生まれで、東北帝国大学理学部・地質学古生物学教室の卒業が1924年である。中学校教諭をへて、大学に入学したから、32歳の卒業である。普通よりずいぶん遅い。この間の大変な努力は、遠藤の死後出版された『窮亦楽通亦楽』(1970)に詳述されている。『窮亦楽通亦楽』は遠藤のお孫さんにあたる大場忠道氏に見せて頂いた。「窮亦楽通亦楽」とは荘子の一節で、徳富蘇峰の揮毫を遠藤は楽しんでいたのである。

幼い頃に両親を亡くした遠藤は、本人の磊落で真摯で

ひたむきな生き方と、多くの人の好意に支えられて、逆境にめげず生きてきた。『窮亦楽通亦楽』を読めば読むほど、遠藤の凄さが伝わってくる。「たゆまず・くじけず」「夜を昼につぐ猛勉強」「鯉節になりたくない」「真実一路」など、『窮亦楽通亦楽』の見出しは遠藤のひたむきさをよく表している。今の世の中で、これほどの苦勞をして古生物学者になる人がいようか、よくぞ途中であきらめずに、投げ捨てずに古生物学者になってくれたという感動を覚えた。

祖母に育てられた遠藤は、小学校の時から小遣い稼ぎにアルバイトもやっていた。小学校高等科の理科の教師の熱意に触れることができたのが、後日の自然科学への興味をもたらしたという。小学校卒業後、家庭の事情で中学にストレートに進めなかった。これが遠藤の長い迂回路の始まりである。師範学校ならば無償で進学できるというので、師範学校のための講習所の入試を受けたらまず失敗、1年遅れて入った講習所を半年で退学処分、実家に軟禁され、たまらず無銭旅行に出る。これも失敗して謹慎状態になる。そして仙台へ失踪する。友人に借金し、祖母には無断である。仙台で東北学院に編入を許可されるが、病気入院で欠席したのに、無断長期欠席で除籍される。憤慨して東京へ出てくる。この時期、誰が後の大古生物学者遠藤を予想し得たであろうか。おそらく遠藤本人もわかっていなかったと思う。でも、これから先も順調でない人生をわたっていく力のあふれでている時期である。

東京へ出てきても、困難は続く。親戚からは家に学資がないから、歯科医になれといわれて、そのつもりで、歯科医院の見習い工をしながら、東京歯科工専の入試を待っていた。規則が変わって中学に入学しなければ入れないというので、日本体育会設立の荏原中学校^{えぼら}2年生に編入する。1908年4月、遠藤16歳の春である。この時点で同学年の友人と1年遅れになる。中学在学中に、遠藤の財産管理をしていた叔父が破産し、上級学校進学は無理となる。

次に、検定試験を受けて中学教員となる道を選ぶ。最初は裁判所の登記所の雇員をしながら、受験準備をする。最初の受験科目として博物学、特に植物学を選んだ。これが古生物学者への道の始まりかもしれない。天に声が届いたのか、旧制第二高等学校の生物・地学両教室の雇員となる。ここで勉強と勤務に励んだ。二高の雇員助手になって二年数ヶ月で検定に合格した。試験は小石川植物園にあった東京大学植物学教室であった。試験官の藤井健次郎に声をかけられて、藤井のプライベートな助手として、植物学教室で働き始めた。ここで、研究者に学者になろうと志を確立した。だが、働き過ぎで入院し、また迂回路である中学教諭の道に変更する。

新潟県立三条中学校と千葉県立木更津中学教諭をへて、1921年東北帝国大学理学部地質学古生物学教室に入学することになる。東北帝国大学だけが検定出身者の入学できる

大学であったからで、地質学を選んだのは、東北帝国大学にまだ生物学教室が開設されていなかったのと、検定試験の勉強中に地質学に大変興味を持ったからであった。

長い迂回路をへて古生物学者となった遠藤は、その後にはぶつかった多くの問題もやはり、「たゆまず・くじけず」「夜を昼につぐ猛勉強」「鯉節になりたくない」「真実一路」として、生きていく。戦前は撫順中学校、満州教育専門学校、満州国国立中央博物館に勤め、戦後すぐ中国の東北大学で勤務した後、帰国、埼玉大学と東京家政大学で教鞭をとった。

岩田正二郎と遠藤

遠藤は長い迂回路の中で、足を引っ張る人にも出会ったが、好意的な多くの人に助けられている。その頂点として、岩田正二郎(1894-1978)がいる。まずは、遠藤の文章をひきたい。

首尾よく大学には入ったものの、手持ちの金壺千円也では3ヶ年の学費としては心細いので、せめて1~2年の間、月々30円の補助をしてくれる人はないものだろうか、と虫のよい考えを起し、二高以来無二の親友であった小倉謙君に事情を訴えてみた。すると、1週間ほどして「自分とは学生時代からの親友で、たぶん君にも覚えがあると思うが、大阪の岩田五郎左衛門君(精芳と号す)に、君のことを話したところ、快諾されて1年分の補助金として360円送ってきたから、同封して君へ転送する。」という内容の手紙と共に、送金してくれた。岩田さんならよく識っている方で、植物園で藤井先生の下で働いていた頃に、植物学科の学生であった人だ。……これによって勇氣百倍、安心して学窓にとび込むことが出来た。岩田さんには、卒業の上は直に返却する条項を書き添えた借用証を送った。

大学在学中の2年目、3年目とその都度岩田さんから補助金のことで話があったが、まがりなりにも私自身で働いて金を得る道もついたので、岩田さんの御好意にばかり頼らずに卒業することが出来た。卒業後は満鉄に奉職し、撫順中学校の教員になった。

さてここで私も月給取りとなった以上は1日も早く岩田さんに借金を返済しなくてはならないのであったが、生活費と研究費におわれて、なかなか思うようにならず、やっとのことで、お返しすることが出来た。それは卒業してから1年と9ヶ月経った。……昭和元年(大正15年の残り)の年の瀬には囊中僅かに10円内外を残し、有り金全部をはたいて、岩田さんに送金し、やっとの思いで肩の荷を下ろし、迎えた新年はまことに爽やかだった。

ところが正月3日の朝、思いがけず、岩田さんから1通の書留便が届いた。今までは人に書留便を出したことはあるが、人からもらったことはめったにないので、何か知らん、と思って封を切る、

「僕は最初から君に金を貸すつもりはなかった。それを貸した形式にして、君に360円を貯えさせたのである。金というものはいくらあってもいいもので、決して邪魔にはならない。この金を研究費にしよう、それを元にして貯蓄をふやそうと、それは君の勝手である。とにかく僕は一度は受け取ったので、今度はこれを君に進呈したい。如何ようにもご自由に」としたためであった。私の生涯中、この時のように感激したことはあまり多くはない。

話は少し前後するが、昭和四年の春、私が欧米留学することになり、暇乞いに岩田さんを訪問した折に、「外国に行けば随分と金がかかるからね、これは少ないが」といって、千円の餞別を下さったので、私は非常に有り難く頂戴したことがある。これは今では百万円にも当たるのであるが、この千円をいただいた様子をそばで見ていた妻が、あとでこんなことを洩らしたことがある。

「一千円という莫大なお金を下さる岩田さんはちょうど鼻紙でもくれるように無造作に出されたのにびっくりしましたが、それを戴いた貴方もまた随分と気軽に受け取りましたね。驚きましたよ。何とか今少し感謝の気持ちの表しようもあつたでしょうに」と・・・

(以上 遠藤, 1970より)

古生物学界では斎藤報恩記念館の斎藤善右衛門(1854-1925)が篤志家として有名であるが、生物学界では岩田正二郎が有名である。岩田正二郎は兵庫県川西市の千三百年以上も連綿として伝わる家柄の当主であった。主人は代々五郎左衛門を名乗り、加茂に在る屋敷は数百年も経った木造の邸宅で、典雅にして渋みのある古代から伝わった重厚さをもっていた。

昭和10年、当時の金で二十数万円を投じて東京滝野川の邸内に岩田植物生理化学研究所を設立し、所長には柴田桂太を迎え、経常費一切を負担して、多くの少壮有

為の学者の研究を後援した。また純学術論文雑誌「Acta phytochemica」を出版した。六甲山に気象観測所を新設したりもした。

また、多年にわたって多くの新進気鋭の画家を育成する意味で買い求められた洋画は実に著しい数に上り、耐震耐火の土蔵内には所狭しとばかり保管され、いつかは岩田美術館とでもいうようなものが出来上がると期待されていた。美術新論社を創立し、多少なりとも画伯も後援した。ところが、第二次世界大戦における日本の敗戦は岩田正二郎のような大地主には幸とならず、家財整理の止むなきに至り、岩田植物学生理化学研究所や洋画のコレクションなどは人手に渡る運命になった。

岩田正二郎には後日談がある。岩田植物学生理化学研究所の蔵書はその後、兵庫県川西市の岩田家にあったが、阪神大震災で岩田家が母屋や蔵も倒壊し、蔵書は、大阪教育大学図書館に寄贈となった(鈴木善次, 私信)。

まとめ

この小文で書いていることは、遠藤隆次の業績のほんの一部である。また、多くは、他の研究者の文章を引用している。それでも、これから古生物学を切り開いていく若き学徒に、遠藤隆次の力強さをなんとか伝えたいと思ひ、ペンをとった次第である。

引用文献

- 遠藤隆次, 1935. 満州の地質及鉱産, 193 p., 三省堂.
 遠藤隆次, 1965. 原人発掘, 182p., 春秋社.
 遠藤隆次, 1970. 窮亦楽通亦楽—遠藤隆次思いでの記, 252 p., 遠藤律発行.
 山口直樹, 2002. 満州帝国国立中央博物館の活動をめぐって. 地質学史懇話会会報, 18, 14-16.

